婦人と子ども　第一卷第拾號　（明治三十四年十月五日）

（本欄は凡て轉載を禁ず）

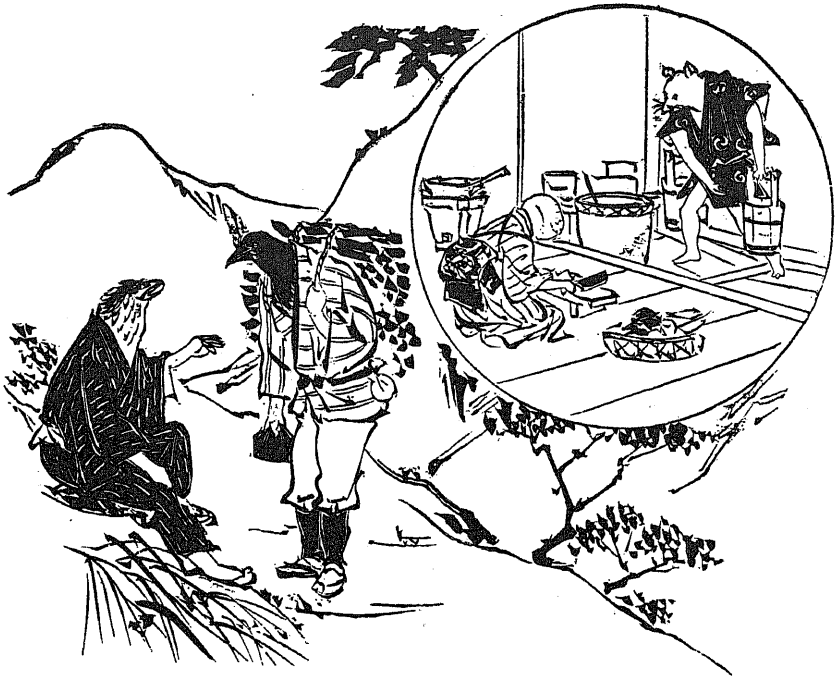
鼠と烏とおむすびとの咄

さてもある處で、二十日鼠と烏とおむすびとが友達になって　一所に家を造らえました。　まづ木をきって來るのが烏の役で　水を汲んだり火をたいたりが鼠の役で　それから料理番とゆーのがおむすびの役とゆー風に　各自仕事をわけて　毎日仲よく暮

して居ましたから　だん〳〵とお金も殖えて來ました。

處が　善くなるに從がって　誰でも何か他の事をやって見たくなるとゆーのが人情です。　夫で或日のこと　烏が家えの歸途で　偶然鳶に出遇った。『やー是わ』といって挨拶をしましたが　話の序に　烏わ今の自分の家の樣子を話して　大變具合が宜ーといって自慢をやった。

すると鳶わ　苦笑をしながら『そりやー君にも似合わない事をやっているじゃありませんか。　まー考



えて御覽なさい　鼠で見ると　水を汲んで火を焚いといたら　もー夫っきり自分の室え歸って　御飯の出來るまで休んでればいーのでしょー。　またおむすびで見ると　一日火の側え座って居って　御飯の番をして　出來た時

分に　ちょいと裏の畑から　大根や葱を取ってきて付けて出すっきりのこと　夫に君の役わどーです此遠い道をはるぐと　そんな重い荷を背負ってさよく〳〵割の悪い話じゃ」

そこで　烏わ『はてな』と考えた　が先づ默って家え歸って　やれ〳〵とゆーので　背中の荷を下して　さて三人一所に御飯をすませ　明くる朝まで一所に寢て仕舞った。

所で　明日になって　さて毎日の様に各自仕事にかゝろーとゆー時になって　さー烏が木をきりに行

かない『今まで大分ながくきつい働をしたから今日からわ一度仕事を取り代えんければいかぬ。』とゆーのです。そこで鼠とおむすびとが よってかゝって その事がいけないから もと〳〵通りにやろーでわないかとゆーことを口が酸くなる程いって見たが 烏わ頑として聞かない。じゃー仕様がない夫でわ籤を引ーて 番をきめよーとゆーので 籤を引ーた所が 今度わ おむすびが木をきり番で鼠が料理番で 烏わ水汲みとゆーことになった。さーこれでどーでしょー。仕方がないから各自其

仕事に取りかゝったですが　さて大變が起った。と申すわ　おむすびが明日の木を取りにいったきりまってもく歸って來ない。　二人わ心配しだした何か途中で災難でもあったのでわないか知らん　もーたまらないとゆーので　烏わ一寸飛んで行って見て來よーといって家を出た。

すると直近くで　犬に出遇った　今しも此犬がおむすびを見付けて　たゞ一口に食って仕舞った所だったのです。　夫で烏わ非常に吃驚して　ひどく犬を攻撃しました『なんだって君、丸で强盜じゃないか』

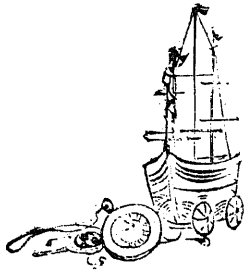
といって見たが　犬の方わ一向平氣なもんで『だって握り飯だもの　道に落ちてたから僕の食物だと思って食べたのだ』　こーいわれて烏も仕方なしに　すごゝと家え歸って來ました。

で家え歸って其事を話した所が　鼠も大變悲しんだが　もー諦らめるより他に仕樣がない　まー二人で出來る丈甘くやって見よーとゆーことにした。夫で烏がお膳を用意すれは　鼠か御飯を拵らえる　それから鼠わちょいと葱を取ろーと思って　裏の畑え行った所が　さー大變　そこにわ一匹の黑猫が見て

居って『あっ』とばかり鼠が逃げょーとする所をたゞ一口に咬えてしまった。

そんなことわ知らないで　座敷でわ烏が　ちゃんと膳の側に座って　待っても〳〵料理番が出て來ない。待ち勞れて勝手へ行って　呼んで見ても出て來ない。仕方がないので自分で　火を焚いて見たがどーも甘く行かないもんだから　少しやけ氣味になって　火を其儘置きっ放しにして　又探して見た。そーこーしてる中に今度わ大變がもち上った。

前程置っぱなしにした薪から火がうつったと見え

て　家中黑煙になって　大火事が始まった『是わ』と驚いて　烏が飛び出よーとしたが　煙で以って　もー出ることも出來ないで　とー〳〵焚け死んで仕舞いましたとさ。

（おしまい）